

第3章 はじめての戦い

「ただいま〜。」

だれもない家に向かって、言ってみた。いつも、のぼるはそうしている。

のぼるは一人っ子だ。お父さんもお母さんも仕事をしているので、かえってきても、だれもないことが多い。というか、だれかいるほうがまれだ。

去年までは、親がはたらいている生徒のための学童保育に行っていた。でも、のぼるはトラブルメーカーだったので、そこもやめさせられてしまったのだった。本当は、6年生までいられるのだが、3年生からは、入っても入らなくてもよかったので、学童保育のほうから、「もう来なくていいよ」通知をもらってしまったのだった。

学童保育で何があったかは、のぼるはあまり思い出したくない。たのしい思い出もないし、いつも上級生や下級生とケンカばかりして、相手が泣いてしまったり、すごく怒ってきたりして、結局、先生たちに、た〜くさん怒られた記憶しかない。

だから、今年からは、学校が終わったら、だれもない家に帰ってくるしかなかった。少しずつさみしさもまぎれてきていたけれど、し〜んとした家で、一人でおやつを食べるのは味気なかった。

でも、今日はミシャと一緒にいる。

のぼるは、横を見てみた。

ちゃんと、ミシャはのぼるを見てくれていた。

「おかえり。」

ミシャも一緒に帰ってきたじゃん。

「だけど、たまには、おかえり、ってだれかに言ってもらうのも、いいでしょ？」

うん。ちょっとはずかしいけどね。

のぼるはおやつを食べたあとに、いつものように、ゲームをすることにした。

「え？もうゲーム？」ミシャが言った。

だって、昨日、クリアしそうだったけど、最後の最後でやられちゃって、クリアできてないんだ。だから早くやりたい。いつも、学校から帰ってきたら、やっているし。

「ゲームについては、お母さんやお父さんと約束ごとはしていないの？」

一応、ルールでは、1日20分、ってなっている。でも、いつものぼるはそのルールを無視していた。だって、だれもないし、見てないし、ゲームはおもしろいもん！

「なぜ、ゲームをたくさんしすぎると、よくないのか、どうして、ルールがあるのかはわか

る？」

宿題しないから？

「それもあるね。まだあるよ。」

う～ん、目に悪いから？

「それもあるね。まだあるよ。」

う～～～ん。おもいつかない。

「のぼるくんは、ゲームはどんなときにする？」

いつも！

「ま、そうなんだろうけれど。とくに、どんなときにしたくなる？」

ひまなとき。

「ひまつぶしでやることがあるのね。ほかには？」

ゲームは大好きだから、いつもやっていたいけれど。

「のぼるくんが言うとおりの、ひまつぶしでやる人も多いかもしれないわね。でも、なんでもそうだけれど、やりすぎはよくないわよね？」

勉強のやりすぎは、いいんじゃない？

「はは。勉強のやりすぎ、か。たしかに、そういう人もいるかもしれないわね。」

ゲームのこわさはね、やりすぎてしまうと、自分の感情、気持ちをまひさせてしまうの。だんだん、現実とゲームの中と区別がつかなくなってしまうこともある。イヤなことがあると、そこににげてしまうこともあるのよ。もし、ゲームをとりあげられると、イライラしてしまったら、それはゲームのやりすぎ、ゲーム依存になっているひとつのサインよ。」

ぼくは、そんなことはないよ！

「そう？じゃ、ためしてみる？」

え？ゲームをとりあげるの？

「ううん、ちがうわ。」

その瞬間、目の前には、大きなドラゴンがたっていた。そのドラゴンは、のぼるの身長
の5倍はありそうだった。まるで、家の近くの高級マンションが、そのまま生き物になったよ
うな高さだ。

そのドラゴンは、昨日までゲームをしていた、最後にクリアできなかったドラゴンそっく
りだった。赤くて、ごつごつしていて、大きなハネがついている。ただ、違うのは、まるで、
そのドラゴンが目の前で、生きているようだ。

え？え？え～～～？

のぼるは、あまりのショックに、足ががくがくして、しりもちをついてしまった。

たしか、このドラゴン、ゲームの中では、火をふくんだよな、

と、のぼるが考えた瞬間、

「ぼわー」

すさまじい音をたてながら、ドラゴンは火をふいた！

のぼるは、ドラゴンから背を向けて、いちもくさんに、逃げたかった。でも、足がぐがくして、どうしても立てない。幸いにも（のぼるには、この状況に「幸い」なことはない、と感じていたけれど）、ドラゴンが吹いた火は、のぼるの頭の上をかすめていった。

「のぼるくん、自分のかっこうを見て。」

なんだかなつかしい声をした。この状況では、どんな声でも、「なつかしく」聞こえたけれど。

ミシャの声だった。でも、すがたは見えない。

あれ？

のぼるは、自分の足元を見てみた。すると、くつ下だけしかはいていなかったはずの足に、今までみたことのないような、じょうぶそうな、ごつついクツをはいていた。それは、クツと呼んでいいのか、のぼるにはわからなかったが、以前にテレビで見た、大昔、ローマ（だったかな？）で、男たちが戦うときに、はいていたクツに似ていた。

よく見ると、のぼるは、右手に剣を持ち、左手に盾を持っていた。すべて、金属のようなものでできている。すべてのかっこうが、そのテレビで見たローマ人のかっこうに似ていた。そして、それは、のぼるがゲームの主人公に着させていたかっこうだった。

もしかして、これは、ゲームの世界？その中にまぎれこんでしまったの？

どうやって？

と、考えた瞬間、ふたたび、ドラゴンは火をふいてきた。

「うわっ！」

のぼるは、考えるよりも先に体がうごいていた。火をよけるために、おしりをつけたまま、からだ全部を、右側によけたのだ。今までのぼるがいた位置に、ドラゴンは火をふいていた。

「あぶなかった・・・」

どうしよう？なんで、こんな状況になっているんだろう？

でも、とにかく、こんなドラゴンからは逃げよう。

そう思って、やっと立ち上がれるようになったのぼるは、ドラゴンを背に、にげようと走った。

はあはあ。

これぐらい走れば大丈夫だろう。と、のぼるはうしろを見た。

ショックでからだが固まった。

さっきと、同じ位置にドラゴンがいる！しかも、まわりの風景も変わっていない。

なんでだ？

「のぼるくん、そこから逃げようとしてもムリよ。ゲームの中でも、一回戦闘が始まったら、逃げられないでしょ？」

たしかに、今、のぼるがやっていたゲームの中では、一度、敵と戦闘になったら、にげられない。やっつけるか、やられるか、だ。

でも、それはゲームの中での話だ！

もし、ここでドラゴンにやられたら、ぼくはどうなっちゃうんだろう？

それを考えたら、こわくてこわくて、また、足ががくがくしてきた。足だけではない。体すべてががくがくしてきた。

がくがく体がふるえた拍子に、のぼるが着ていた防具が音をたてた。その防具は鉄でできていたので、うごくど、音が鳴るのだ。

のぼるは、その音を聞いた瞬間、ふっ、と、おちつく感じがした。

「そうよ。のぼるくんには、ドラゴンから守る防具を着ているわ。それで、自分を守れるのよ。」

次に、のぼるは、自分が持っている剣と盾を見た。

「そう。その剣と盾で、そのドラゴンと戦えるの。」

今日、ミシャが学校で言っていたことを思い出した。

たしか、逃げるのではなくて、向き合うことが大切、と言っていた！

「すごいわ、のぼるくん！そのとおりよ。」

すがたは、なぜか見えなかったけれど、ミシャの声を聞いているだけで、なんだかのぼるは勇気がでてきた。

にげられないのだし、ここにいる以上、戦うしかない！

のぼるが覚悟を決めた。

覚悟を決めたとたん、何をすればいいのか、のぼるにはわかった。

まず、ドラゴンは、火をふく。それは、盾でよければいい。

その瞬間に、ドラゴンがまた火をふいた。のぼるは、体を小さくして、顔の前に、盾をう

ごかした。火は、のぼるにかからずに、盾が守ってくれていた。すこし熱かったが、やけどをするほどではない。

よし！ひとつ、敵からの攻撃を守ったぞ。

たしか、次は、ぼくが攻撃する順番だ。のぼるは、勇気をふりしぼって、剣をドラゴンめがけて、ふりかざした。

「やーーーーっ！」

怖くて、目が開けられない。剣をめちゃくちゃにふりまわしてみた。

・・・

なにも物音がしない。そーっと、のぼるは、目を開けてみた。なんと、ドラゴンが、のぼるの小さな体を、指で持ち上げている。のぼるは、ドラゴンと目があった。

「ひゃーーーー！！！！」

声にならない声のでた。ドラゴンの大きな瞳を見た。

その瞬間、ドラゴンが、かなしい表情をしたように見えた。その大きな瞳には、のぼるがじたばたしている姿がうつっている。その自分の姿を、のぼるは鏡を見ているように、はっきり見えた。

のぼるは、動くのを止めた。

「戦いたいわけではないの？」

ドラゴンが考えていることが、のぼるには、手に取るようにわかった。

ドラゴンは、大きいし、ごつごつしているし、火もふくけれど、凶暴なわけではないんだ。べつに、戦いたいわけでもないんだ。ただ、その見た目から、「敵」役として、ゲームに使われたりしているんだ。それが、とても悲しいんだ。

わかった瞬間、のぼるは、いつもの自分の家にいた。

ミシャが横で、ほほえんでいる。

「よく気がついたね。」

そうか、ミシャは、ドラゴン＝敵をつくりだしているのも、また、自分たち自身だということも伝えたかったのか。

「そうよ。ドラゴンにかぎらず、みんなが怖い、と思っていることは、大体は、人間の恐怖心がつくりだしたことなの。」

おばけとか？

「そう。」

モンスターとか？

「そう。」

宇宙人とか？

「そうよ。」

勝手に、こわいもの、敵、と見なされてしまったのは、かわいそうだね。なにも悪いことはしていないんだもんね。

「のぼるくんは、とてもやさしいのね。」

のぼるは、あまりに聞きなれない言葉でほめられたので、一気にはずかしくなった。顔があつい。きっと、まっかつかだ。

「やさしい、って言われたことなかったのね。はずかしいことでは、ないよ。とてもステキなことね。」

やめて！もっと、はずかしい！

ミシャがたのしそうに、笑っていた。

「のぼるくん、ゲームの世界はどうだった？」

もう、二度といい！

「現実とゲームの世界は違っていた？」

もちろんだよ。あんなこわい思いは、現実ではしないもん。

「そうかしら？」

どういう意味？足ががくがくするほどこわい思いは、したことないはず。

「足がすくむほど、こわい思いはしたことないのね。でも、どうしても、勇気がでなくて、一歩でなかったことはあるんじゃない？」

そんなにこわがりじゃないぞ。

「こわい、と思うことは、弱いことではないわよ。なにかしら、こわい、と思うことは、みんなあるだろうしね。でも、それから逃げてばかりいると、余計にこわくならないかしら？」

のぼるの頭に、ふと、担任の先生の顔がでてきた。あの先生が怒ると、体は固まる。

「ほら、あったわね。でも、今日あったことも思い出してみて。」

1日にたっくさんのことがありすぎて、忘れていた！書道の道具を忘れたことを、言いにいったのは、今日だった。言ったら、意外に、先生はやさしかったんだった。

「そう、逃げてばかりいると、自分の中で、どんどんこわいもの、こわい人は、大きくなっていくの。そして、自分を守るために、また見ないふりをしていく。そうすると、恐怖心だけ大きくなっていくのよ。もちろん、ときには逃げることも必要かもしれないけれどね。」

のぼるは、ミシャの言葉を聞いていたら、なんだか、どーん、とつかれがやってきた。ほっとしたのだ。

「よくがんばったわね。恐怖心も、今、のぼるくんが感じている安心感も、疲労感も、とても大切な感情の一つ一つよ。ゲームをしすぎると、これらの感情もまひしてくるの。あまり感じなくなってくるの。」

それは、イヤだ！ロボットにはなりたくない。

「そうね。感情を感じるからこそ、楽しい、うれしい、充実、など、ポジティブな感情も感じられるのよ。だから、一つ一つの感情を大切にしてみようね。」

のぼるは、ねむくてねむくて、しょうがなかった。ソファで横になりながら、ミシャの声が遠くで、聞こえていた。

